松本清張全集 4

松本清張全集 4

松本清張全集 4　　黒い画集

定価　1400円

1971年 8 月20日第 1 刷　　1978年 4 月15日第 5 刷

著　者　　© 松本清張

発行者　　樫原雅春

発行所　　株式会社 文藝春秋

〒102　東京都千代田区紀尾井町 3

電話(代表)03—265・1211

印刷所　　凸版印刷株式会社

落丁乱丁はお取替えします

黒い画集　3
解説　多田道太郎　485

装 幀 伊 藤 憲 治

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

黒い画集

遭難　5
坂道の家　67
紐　157
天城越え　221
証言　241
寒流　252
凶器　321
濁った陽　343
草　419
『黒い画集』を終わって　480

遭　難

1

鹿島槍で遭難（R新聞九月二日付）

A銀行丸ノ内支店勤務岩瀬秀雄さん（二八）＝東京都新宿区喜久井町××番地＝は八月三十日友人二名と共に北アの鹿島槍ヶ岳に登ったが、霧と雨に方向を迷い、北槍の西方牛首山付近の森林中で、疲労と寒気のために、三十一日夜凍死した。同行の友人は、冷小屋に救援を頼みに行ったが、同小屋に泊まっていたM大山岳部員が、一日早朝救助におもむいた時は間に合わなかった。

2

（この一文は、岩瀬秀雄の遭難の時、同行していた浦橋吾一が山岳雑誌『山嶺』十一月号に発表した手記である。浦橋吾一は岩瀬秀雄と同じ勤め先の銀行員で二十五歳、岩瀬よりやや後輩で、本文中に名の出る江田昌利は三十二歳、同銀行支店長代理である。この三人が八月三十日に鹿島槍ヶ岳へ登った）

鹿島槍に友を喪いて　浦　橋　吾　一

一

私が江田昌利氏から鹿島槍行をすすめられたのは七月の終わりであった。江田氏はS大当時、山岳部に籍を置いていて、日本アルプスの主要な山はほとんど経験ずみだし、遠く北海道や屋久島まで遠征したことのある、わが銀行内きっての岳人だった。これまで江田氏に指導されて山登りが好きになった行員はずいぶんいる。

「岩瀬君が行きたいと言っている。二人だけではつまらないから、君を誘ったのだ」

江田氏は私に言った。休暇の都合や、登山に興味のない者を除くと、私だけということになったらしい。

職場では仕事の関係で夏季休暇を代わりあってとっていたが、江田氏も岩瀬君も私も、係が違うので偶然にいっしょに休暇がとれることになったのである。

ただ、私の場合は山の経験はほとんどなく、穂高の涸沢小屋まで一回と、富士山に一回登っただけの初心者である。岩瀬君のほうは八ヶ岳、甲斐駒ヶ岳と、北アには槍と穂高に三度ほど登っている。つまり、登山がおもしろくなりかけてきたところであった。私はこの二人ならよいと思い、江田氏の勧めを承知した。休暇をとっても、別にどこに行

くあてもなかったので、かえって誘われたことをよろこんだ。

われわれ三人は、それからよく集まっては相談した。銀行の帰りに喫茶店で長いこと話をしたり、日曜日には江田氏の自宅に岩瀬君といっしょに行ったりした。

「岩瀬君がね、今度は、鹿島槍から五竜を縦走したいと言っていた。穂高のようにあまり人の混まないコースだし、二泊三日の予定ではちょうどいい山行だと僕も思ってね」

江田氏の言葉では、鹿島槍の発案者は岩瀬君のようだった。人間の運命というものはわからないものである。

岩瀬君は私よりは、はるかに身体が頑丈で、いつもその丸っこい顔に鮮かな血の色をみなぎらしていた。どちらかというと蒼白い顔色の多い銀行マンのわれわれの間では、その元気そうな姿は目立っていた。彼は貸付係だったので、仕事上、外回りが多かったが、銀行のドアをあおるように開いて外から帰ってくるときの大股な歩き方や、みごとな頬の血色は、机にいる内勤の者に、風が舞いこんだような新鮮な印象を与えた。

岩瀬君と私とは係が違っている関係もあって、それほど親しくはなかったが、この山行の話になってから急に近づきになった。彼は私と同様に独身で、アパート暮らしだったが性格は朗らかで、嫌味がなかった。酒は好きだったようである。彼は今度の鹿島槍縦走をひどく愉しんでいた。

われわれは休暇の都合で、二泊三日と初めから決めていた。予定では、八月の中旬にするつもりだったが、江田氏の方に故障があり、結局、八月三十日からということになった。何といってもベテランの江田氏がリーダーであった。私のように山に慣れない者は江田氏だけが頼りである。実際私は、支度などについていろいろと教えてもらった。

岩瀬君の方は私よりは経験者だから、自信があり、多少、気負ったところがみえた。あとから考えて彼の遭難の素因の何パーセントかはその心理にあったと言えなくはなさそうである。こう言うと、死者への礼を失するようだけれど、登山はどのように経験を積んでも、常に最初のように謙抑でなければならぬ、という戒めは守らるべきである。

そのことは江田氏も分かっていて、何かと岩瀬君の疾る心を押さえていた。しかし人間の弱さはそれを徹底的に通し得なかったことに今度の悲劇が生じた。これは誰を責めることもできない宿命的な不可抗力であろう。

それはともかく、われわれは最後の打合せを江田氏の自宅でおこなった。岩瀬君はアパートが近いせいか、江田氏の家にはたびたび遊びに行っているらしく、江田夫人から、

「岩瀬さん、あんたなんか、自信過剰な方だから、うっかり山をバカにするとひどい目にあうわよ」

と、冗談を言われていた。これが実際に予言となって的中したのだから、まったく人の命の一寸先は分からない。神様でない岩瀬君は、やはり冗談めかして夫人と軽口をやりとりしていた。江田氏も私も、傍で笑っていたのだ。

そのとき、最終的に決定したスケジュールは次のとおりだった。

八月二十九日　新宿発二十二時四十五分。
三十日　信濃大町着。バスにて大谷原へ。
大谷原→冷池→爺岳→冷小屋泊。
三十一日　冷小屋→鹿島槍→八峰キレット→五竜岳→五竜小屋。
九月一日　五竜小屋→遠見小屋→神城。松本発二十二時三十九分。
二日　新宿着四時四十五分。

この予定はきわめて普通のコースである。なお、慎重な江田氏は私のために往路の夜汽車を三等寝台車にすることを主張した。

これは、普通三等車では、登山のための乗客で満員となり、その混雑で席がとれず、不眠をおもんぱかってのことだった。眠りが十分にとれないと、翌日の登山に疲労度が加わり、経験のない私が脱落するかもしれないと考えたのであろう。そのために、江田氏は奔走して苦心の上、寝台券を三枚手に入れた。これについて岩瀬君は、それほどまでにしなくとも、と多少反対するところがあったが、すべて初心者の私のためだというので納得した。もっとも、寝台券三枚は江田氏が料金を出してくれたので、彼も実は感謝していた。

いよいよ二十九日の晩、われわれは、新宿駅に集合した。その日を待っていた岩瀬君がいちばん喜んでいたようである。季節中には毎度のことながら、この夜行列車を待つ登山姿の乗客が、ホームから地下道の階段、通路に二列になって長くすわりこんでいる。早くから汽車の入構を待っているので、退屈と身体の不自由のためにすでに疲れた顔つきをしているのが多い。

そこへ行くと、われわれは悠々たるもので、遅く来てらくらくとした寝台に横たわることができた。登山客としては贅沢この上もない。少々もったいない気持である。

車内では三人でウィスキーの角瓶を一本空けた。江田氏が下段、岩瀬君がその上段、私は三つばかり離れた場所の下段に寝台をとった。岩瀬君は、その時も愉快そうに話をしていた。

私はあまり飲めないので、ウィスキーの酔いでまもなく眠りについた。

しかし、しばらくして便所に起きたとき、正面の出入口のガラスドアに人影が映っているのが見えた。それがどうも岩瀬君らしいので、ドアを開けると、やはり岩瀬君で、彼は二等車との間のデッキの上で、ぼんやり外を眺めていた。暗い中で、彼の喫っている煙草の火が赤く呼吸していた。

「まだ起きていたのかい？」

私が声をかけると、彼はちらとふり返ったが、

「うん、少し酔ったので風に当たっている」

と、はずまない声で答えて、また外の方に顔を戻した。外は暗い闇が流れ、星のある空に山のわずかな黒い輪郭が動いていた。

私は眠いのと、岩瀬君の姿がひとりでたたずんでいるのを好んでいるふうに見えたので、それ以上話しかけずに自分の寝台に戻った。江田氏の寝台には幕が垂れ、中からかすかないびきが聞こえていた。通路の薄暗い電灯で腕時計を見ると、一時を過ぎていた。

「塩山、塩山」という駅員の眠そうな声を聞いてすぐに私は覚えがなくなった。

身体を揺すられて目をあけると、江田氏がもう身支度して立っていた。次は松本だというので、あわてて靴をはいた。眠っている間に着いたので、さっぱり距離感がない。窓の外を見ると、薄明の中を平野が走っていた。

岩瀬君も起きていて煙草をくわえていた。少し、ぼんやりした恰好だった。

松本駅に着くと、大糸線の電車がすでに発車ベルを鳴らしていた。ほかの連中にまじって、われわれもホームを駆けた。

電車の中は登山姿の人間とリュックとで満員だった。大町に着くまで立ちどおしだったが、ほかの連中は混みあう三等車で一夜を窮屈にかがんできたのにくらべ、われわれは寝台車でらくらくと手足を伸ばして寝てきたのだから、ずっと贅沢である。

混んでいる車内では、三人ばらばらな所にいたが、江田氏は吊皮につかまって本を読み、岩瀬君はリュックの上に腰をかけていたようだった。

早朝の大町の駅前にバスを待っているのは登山者ばかりで、女性も多かった。すでに秋めいた冷たい空気が、この盆地の町におりていた。女性の身につけている赤い色が暖かさを思わせたくらいだ。

バスで約一時間、相変わらず立ったままだった。リュックが、人間と人間の間を岩石のように埋めている。土曜日なので、季節の終わりかけにもかかわらず、人が多いのであろう。ここでも、われわれは離れていた。

林檎畑や桑畑がしばらくつづくと、バスは山峡の中にはいって行く。陽が射しはじめ、遠くの山頂の雲から色が輝きだした。いい天気である。道は狭くなり、坂になった。屋根の上に石をおいた鹿島の部落を過ぎると、人家は途絶し、森林がはじまった。

終点の大谷原に着いて、昨夜以来の乗物の継続から解放された。みんなぞろぞろバスから降りて背伸びしていた。水のない、白いごろごろ石だけの川原に小さなキャンプが一つぽつんとあって、幕の間から人の首が出てこちらを眺めていた。

バスから降りた登山者の半分は、朝食のため川原の石の上に散り、半分はそのまま山の方角に向かって出発した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「ぼくらもここで朝めしを食べようか？」
江田氏が言った。
「そうですな」
私が賛成し、岩瀬君がうなずいた。このとき岩瀬君は白い石の上を歩いて行く登山者の黒い姿を何となく眺めていた。
江田氏がリュックから、昨夜新宿で買ったすしの箱詰めを出した。空腹だったので私はよく食べた。
「昨夜、よく眠れたかね？」
江田氏が私にきいたので、私は熟睡したと答えた。岩瀬君はコッヘルで湯を沸かす支度をしていたが、何とも言わなかった。私は彼が遅い時間にデッキに立っているのを見ていたが、何時に寝たのか知らなかった。
ここで約四十分を過ごし、ぽつぽつ周囲の人たちも立ちあがって歩きだしたので、われわれもリュックを背負った。背中にかかった五貫の重さがはじめて出発の意識を密着させた。水のない白い川を横切るとき、先頭に江田氏が立ち、次が私、後ろが岩瀬君だった。この順序は、最後まで変わらなかった。川のふちには、悪戯のように小石を積んだケルンがいくつもあった。
「かわいいもんだな」
江田氏がそれを見て、つぶやくように言うのが聞こえた。
小さなダムを過ぎてから径はたえず、川と森林の間につづいていた。それほどの勾配ではない。そのせいか、江田氏の足はかなり早いように思われた。
「ちょっと休憩したいな」
岩瀬君がひとりごとのように言っているのが耳にはいったので、私は、前の江田氏にそれを取りついだ。
「そうか」
江田氏は、岩瀬君の方をちょっと振り返り、リュックをおろした。そこからは川におりることができた。
「浦橋君もはじめてだから、この辺で休もう。西俣出合までちょうど半分来たよ」
江田氏は初心者の私に気を使ってくれた。ほかの何組かは、われわれの頭の上を通りすぎ、唄声が森林の中から聞こえていた。岩瀬君は岩の上に立ち、川を見ながら煙草を喫っていた。
「岩瀬君は少し元気がないようですね」
私は彼の姿を眺めて江田氏に言った。
「出発前にあんまり張りきった反動だろう。寝台でらくらくと眠ってきたから、身体の調子はいいはずだ」
江田氏は答えた。
「ぼくは夜中に目をさましたが、上段の彼は高いびきで眠っていたぜ」
私はそれを聞き、彼がまもなくデッキから帰って寝台に横たわったことを知った。江田氏の言うとおりで、私自身は少しも疲れてはいなかった。
「さあ行こうか」

江田氏が出発を告げた。岩瀬君が黙って岩の上から戻ってきた。ふたたび、楢、栂、樅の林の中を歩いた。川は径から離れ、崖の下から音だけがしていた。そしてそこを歩いているのは、われわれ三人だけであった。径はしめっていた。

やがて、突然といった感じで渓谷が割れ、空がひろがった。川がすぐそこを流れ、吊橋がかかっていた。川の正面はV字形の山峡となり、その間に南槍と北槍の東尾根とが高く出ていた。

陽が完全にこの山の襞と色合いとを詳細に描き分けていた。白い雲霧が裾からしきりと上昇して、それを隠顕させた。

「さあ、ここで一休みだ。これからが大変だからな」

江田氏が私と岩瀬君に言った。

われわれが川のふちに出て石の上に腰をおろすと、それまで休んでいた若い男女の一組が出発した。彼らは真向かいの急な斜面の小さい径を登りはじめた。

われわれは西俣出合で四十分ばかり休息した。

この四十分の間に、V字形渓谷の正面をふさいでいる北槍の東尾根は、絶えざる雲の運動で部分を見え隠れさせていたが、われわれの休止の終わるころには全体の眺めが落ちついた。わずかに薄い霧が余煙のように岩肌をはいあがっているだけであった。

陽が高くなり、山の翳りの面積がずり落ちた。南槍と北槍の中間にある雪渓が輝いていた。

「今日は天気がいいな。ぼつぼつ行こうか」

江田氏が空を見上げて言った。

休止の間、われわれは川の冷たい水を飲み、水筒に詰めた。水は上流の雪渓の雪が溶けこんでいるので二分間も足を浸けていると赤くなり、痛さを感じた。

「これから先は水がないから、ここで水筒に十分に入れておくんだ」

江田氏が注意した。実際、その辺の石の上にも、水筒に水を補給せよと注意書がしてあった。

飲み水は氷のように咽喉に刺激を与えて快かった。岩瀬君は何度もコップに汲んでは飲んでいた。よほどうまいとみえて、少し飲みすぎると思われるぐらいだった。

われわれ三人以外に、吊橋のかかっているこの川原には誰も残っていなかった。

「さあ、これからがちょっと大変だよ。急な上り坂がしばらくつづくからね。眺望はきかないし、苦労ばかりで、ちっともおもしろくない道だ。だが、そこを辛抱して、高千穂平まで登ると、すばらしい眺望が待っている」

江田氏は説明した。

「その高千穂平までどれくらいかかりますか？」

「三時間だね」

江田氏が先頭に立って歩きだしながら私に答えた。

その三時間の登りは想像以上に苦しかった。径は樹林帯の中にジグザグな急坂をどこまでもつづけていた。五分もすると汗が出はじめた。

樹の重なりのほかは視界にはいるものはなく、変化もなかった。樹海は静止していた。一歩一歩這いあがる作業だけが目的を感じさせる唯一の動きであった。

前を登って行く江田氏の足どりには、山歩きに慣れた確実さがあった。山靴の運びに狂わないリズムがあったし、余裕があった。ときどき、その黒いアルパイン・ベレーがふり返っては、私と岩瀬君の様子を眺めた。

しばらくすると、私のあとに来ている岩瀬君がひどく遅れていることに気づいた。彼の焦茶色のシャツはずっと下方の樹の間でゆるく動いていた。私は、はじめ彼が何か気に入った植物でも見つけて道草を食っているのかと思った。

「岩瀬君は疲れているようだ。この辺で一休みしようか」

江田氏は立ちどまって言った。このとき、岩瀬君はいかにも大儀そうに登ってきていた。彼は口をあけ、顎からは汗が滴り落ちていた。

「岩瀬君、リュックをおろしたまえ、楽になるまで休むからな」

江田氏がいたわって言った。

岩瀬君は、そのとおりにリュックを肩からすべりおろし、草の上に身体を投げた。急な斜面のために彼の姿勢はまだ立っているような恰好であった。それから彼は水筒を口に当てて、咽喉を鳴らした。

われわれは二十分くらいそうしていた。ただ江田氏だけは、リュックを背負ったまま、ちょっと腰をおろしただけで、径からはずれた樹林の中をがさごそと音たてて歩きまわっていた。三人の若い男が登ってきたが、われわれの腰をおろしている傍をよけるようにして行った。

「お先に」

と、見知らぬ彼らは挨拶を残した。

「じゃ、ぼくらも行こうか」

江田氏が岩瀬君を見て言った。岩瀬君はうなずき、身体を起こしてリュックをとった。

単調で、苦しい運動を要する歩行がまた始まった。どこまで登っても、樹林はいつ切れるともなくつづいていた。それでも少しずつ変化が現われた。樅が減って、椈が多くなり、樹の背が低くなった。

しかし、相変わらず後尾の岩瀬君は、遅れがちであった。われわれは途中で、五六回くらい休止をした。そのたびに、岩瀬君はリュックをおろし、身体を横たえ、あかい顔に流れる汗を拭いた。彼の水筒の水は四度目くらいでなくなった。あとは江田氏が自分の水筒を与えた。

岩瀬君は私よりは山歩きには経験者のはずである。その彼が私以上に疲労しているのを見て、少し意外だったが、彼にはこのように際限のない急斜面の登り道が不得手だったのであろう。江田氏の世話は、私よりもむしろ彼の方に

向けられ、注意が払われた。高千穂平に登りつくまで四時間近くかかったのは主にそのためであった。

高千穂平からは急な登りでないため、少しは楽だったし、これまでの代償のように眺望がひらけたので愉しいコースであった。右手には南槍と北槍との隆起がつづき、その果てに東尾根の急激な傾斜が谷に落ちていた。左には爺岳の稜線がある。どの頂上にも岩壁にも明かるい陽が当たり、皺波の陰と明度とを浮彫りしていた。

岩瀬君もここからは少しずつ元気を回復したようだった。われわれはやはり縦列になって這松の覗いている赤い岩の上についた道をたどった。苦労の末に脱出した樹林帯は、渓谷の下になだれをうって沈み、その上に陽が照りつけていた。その暑そうにあえいでみえる蒼い色のひろがりを上から見おろすのは、今までの仕返しのようで、ちょっと快かった。

江田氏は東尾根の稜線を指して、あれが第一岩峰で、あれが第二岩峰だと教え、そこに登った話などをひとりでしゃべっていた。実際、歩くにつれての周囲の眺望は、はじめて登山の実感を私に満たし、愉しさを湧かせてくれた。

赤岩尾根についたその径は、やがてはずれてトラバースみたいになると一つの鞍部に出た。

「ここが冷の乗越だ。小屋はもうすぐだよ」

江田氏がふり返って励ますように言った。別の大きな稜線がそこで合していた。その主稜が信濃と越中との国境だった。

この鞍部に立つと、左手には黒部の深い渓谷が陥没していて、その向こうに立山と剣の連峰が真正面だった。これは雄大だった。右は今までわれわれの目についてきた南槍と北槍だが、陽の具合で大冷沢北俣の斜面が黒い翼のような影をつくっていた。南の方には、爺岳の頂上があまり高くない位置にあった。

この稜線を歩いて行くうちに、ちょっとした樹林帯にはいったが、そこを抜けると小屋が目の前に突然といった感じで現われた。すでに傾いている陽に半面をくっきりと光らせたその小さな建物は久しぶりに人工的なものを見た安心を私にどこか与えた。この山裾にとりついてそこへ着くまで、われわれは八時間を要していた。

そこには濁った一坪あまりの小さな池があった。地図に載っている冷池がこれだと江田氏は笑って言った。地図にあるくらいだから、もっと大きくて、もっと山湖を思わせるような深く澄んだ池だと考えていたのは私の錯覚であった。

その地図は五万分の一の《大町》である。鹿島槍、五竜岳の縦走はこれ一枚でたりるのだ。よけいな地図は不必要で邪魔だという江田氏の意見にしたがって、われわれはこの一枚だけを携行していた。

小屋では五十ばかりの頑丈な肩をしたおやじが迎えてく

れた。土間にはいると、板敷きの広い宿泊室には、登山荷物がいくつか積んであった。客は三四人しかいなかった。今晩ここに泊まる予定で着いた者も、今は近くの山に散って歩いているのだとおやじは言った。

「爺岳に登ってみるか、往復二時間もあれば行ってこられるが」

江田氏が岩瀬君と私とを見くらべて言った。岩瀬君は頸を振って、

「ぼくはよそう」

と、短く答えた。そのとき彼の身体は非常に大儀そうに見えた。

私も疲れていたので、彼に同調して断わることにした。

「もう四時だからな、少し遅いか」

江田氏は時計を見て残念そうにつぶやいた。陽がずっと西へ落ちて赤味を加え、剣岳がぐっと黒くなってきていた。雲が黒部の渓谷に這いおり、少しずつ厚味を重ねていた。予定では、この小屋に到着するのが三時だったことを私は思いだした。

「予定より一時間遅くなりましたね」

私が言うと、江田氏は、

「ああ、はじめての君はともかく、岩瀬君があれではね」

と、低い声でぼそりと言った。あんがいだ、という顔つきがやはり出ていた。

その夜は、小屋の薄い布団の上でごろ寝をした。いざ寝るときになってみると、広い板の間は人間で足の踏み場もないぐらいに混みあった。

はじめ容易に私は寝つかれなかった。背中をノミが這いまわっているのがまず気にかかった。それから人の話し声がする。山の自慢話ばかりだった。

遅くなると、それは小さな声でささやかれたが、そんなぼそぼそ声がよけいに耳について神経にさわった。関西の人が来ているとみえて、大阪弁のもつ粘液性の話し方がそのいらだちを掻き立てるようだった。

私は寝返りを打ったついでに隣に寝ている岩瀬君を見ると、薄暗いランプの光の中で、彼の目が天井を見つめて開いているのを知った。彼もやっぱり話し声が耳にはいって眠れないのだと私は思った。

江田氏は軽いいびきを立てて熟睡していた。こういう山小屋の習慣にはいかにも慣れているような眠り方であった。

二

翌朝、われわれは七時すぎに冷小屋を出発した。岩瀬君は元気そうにしていた。が、私は昨日の疲労が足や腰に鈍痛となって残っていた。

この日は朝から空が曇り、うす陽が射していた。上々の天気ではない。昨日は全体をはっきりと見せた周囲のどの山も、鉛色の重々しい厚い雲海に閉ざされていた。風までが何だかしめっぽく思われた。

灌木帯の中を一時間ばかりすすむと、道は布引岳を過ぎて赤茶色をした小石の多いガレ場となった。

このあたりに来ると、不意に私の耳にサイレンの音が聞こえた。私はおどろいて足をとめた。

「大町の工場のだね」

江田氏が言った。なるほど、それは、はるか下の方から伝わってくるという感じだったが、あの大町の騒音が二千数百メートルの高差のある辺まで聞こえることが、奇異な感じであった。

私は、モンブランの頂上に登って行く登山者の耳に、麓の村落のチャペルの鐘が聞こえてくる外国映画を思いだし、ロマンチックな気持になった。

剣、立山の連峰は妙にくろずんだ雲に前面を張られて見えなかった。それは、最後まで変わらなかった。

小屋を出て二時間もすると、われわれは大きなケルンのある南槍の頂上に立った。そこは小さな平地になっていたが、周辺の眺望はさらに雲に閉ざされてまったく利かなかった。

「あいにくの天気だったな」

と、江田氏は雲ばかりの展望を眺めて言った。

「ここからは北アルプスの山が全部見えるんだ。ここから見えない山は、モグリだというぐらいだからね。残念だな」

岩瀬君は呆然として腰かけて眺めていた。

この時になって風の吹き具合が強くなっていることに気づいた。それは正面から吹きあげてたたいてくるような湿気を含んだ風だった。ガスが白い煙のように谷間から上昇し、われわれの方に向かって流れてきた。

「これはいけない。天気が悪くなった」

江田氏は顔をしかめた。

かまわない、予定どおり進もうと言いだしたのは岩瀬君だった。彼の顔には、昨日とはまるで違う精気のようなものがみなぎっていた。

しかし、北槍をすぎたあたりから、白いガスがしだいに濃くなってきたようだった。眺望はいよいよ利かない。ただ、行く手の径が急傾斜で下降し、その二十メートル先は白い霧の中に消えていた。風が強いため、霧は激しい動きで巻いては流れた。

「危ないな」

江田氏が危ぶむように歩みをとめて言った。この尾根道の両方は急峻な渓谷に落ちこんでいて、ことに北壁の方からはげしい風が吹きあがっていた。

その風のために霧が揺れ、瞬間的に下方に裂け目を起こした。薄くなった霧の亀裂からは、岩壁の一部がのぞいたが、それは、はるか足もとの下の方だった。白い雪渓が、ずっと下に遠い距離で見えたとき、かすかな恐れが私にも起こった。私の身体が風に吹き倒されて、この霧の巻く急斜面の壁を転落して行く幻覚が起こった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.